■体験版■

知らぬ間にスワップされて新妻を実の兄に寝取られた弟

～第二部 寝取り調教篇～

夏目 棗（なつめ なつめ）

❑❑ 登場人物 ❑❑

● 広一（こういち）＝二九歳。夫婦で輸入小物の雑貨商を営んでいる。

● 幸二（こうじ）＝二〇歳。学園卒業後小さな貿易関係の会社に勤めていたが、彼女の卒業と同時に籍を入れて兄夫婦の仕事を手伝う事になった。

● 三咲（みさき）＝二六歳。ロングヘアの一見お嬢さまっぽい風貌だが、エッチの時は意外と……。本人曰く、広一に一目惚れして駆け落ち同然で押し掛け女房に。

● 操（みさお）＝一八歳。ショートカットで巨乳。養護施設で育ったが明るく元気な娘。幸二の二学年後輩で彼女から告白して付き合い始めた。幸二の新妻。

❏ 第一部のあらすじ ❏

広一と幸二は近所でも評判の仲の良い兄弟だった。幸二がまだ幼い頃、航空機事故で両親が他界すると、広一は通っていた学園を中退して両親の残した輸入小物の雑貨商を継いだのだった。親戚縁者も殆んど居ない境遇で、生きる為に広一は我武者羅に働いて歳の離れた弟を学園にまで進学させたのだった。

しかし、海外への長期の買い付けやら出店コーナーの開拓やらで家を空ける事が多くなり、兄嫁は淋しさもあり義弟と何度か身体を重ねてしまっていた。（こっそり義弟の筆下ろしをしてやったのが始まりだったのだが……）

そして、弟が嫁さんを貰う事になった。お互い身寄りの無い者同士だったので、兄夫婦を介添えに教会で四人だけのささやかな式をあげた後、新婚旅行代わりに親睦も兼ねてと四人で小旅行に出掛けたのだった。

処が、本来なら祝いの席となる筈だったこの小旅行の宿で兄は密かに策略を巡らせていたのだった。

妻と弟の関係に気づいていながら知らぬ振りを通していた兄は（自分も海外で眼が

届かないのを良い事に浮気を繰り返していたのだが）このタイミングでそれを持ちだして妻に協力させるのだった。
弟を酔い潰れさせた兄は、何と隣の部屋の新妻の布団に弟に成りすまして潜り込んでしまう。
そして、灯りを落とした暗闇の中で、歳は離れていたが体型や声などそっくりだった義兄を夫だと信じて疑わずに新妻は抱かれてしまったのだった。

しかも、それで満足したかに思えた兄の魔の手は新妻に更なるステージを開いてゆくのだった……。
一泊旅行の予定がもう一泊していこうという話になり、急遽入った宿では一部屋しか取れなかった。その夜、同じ部屋で兄夫婦が始めてしまい、弟も躊躇(ためら)いながらも新妻の身体を求めた。しかし、弟と初めて（！）身体を重ねた新妻は違和感を覚えて途惑ってしまう。
「昨日とは……違う……」と。
更に、淡白な感じで早々に弟が果ててしまい、新妻が風呂に入って戻ると義兄はいなかった。しかも四つ並べて敷かれていた自分の布団には何故か義姉が眠っていたの

だった。途惑いつつも仕方なく義姉の布団に入って眠ろうとした時、義兄が戻ってきて新妻の耳元で囁いたのだった。

「おい、二回戦いくぞっ！」

焦って「違います、あたし操です」とあげようとした叫び声ごと唇を奪われ、新妻は身体を弄（まさぐ）られてしまう。先程の弟（夫）との行為ではイケずに燻っていた官能を呼び覚まされて拒むに拒めず身を捩る新妻。

新婚の夫（弟）も義姉も同じ部屋で眠っている横で義兄の執拗な愛撫に翻弄される新妻は……。

小旅行から帰った日の夜の事だった。
結局、操は心の奥底に棚上げしたままの問題に向き合う事もできずに夜を迎えてしまった。勿論、操は意識的に義兄との接触を極力避けていたのだが、逆に幸二からも何気に避けられているような気がしていた。
そして、慌しく一日が終わり操が風呂からあがると、居間で兄夫婦が水割りを飲みながらＴＶで映画を見ていた。甚平姿の前をだらしなく開(はだ)けた広一にしな垂れ掛かるようにしている三咲は透け透けのピンクのネグリジェだった。
勿論、操は義兄と顔を合わせたくなかったのだが、彼女たちに用意されていた二階の寝室（というか、幸二の部屋を改装しただけだが）に行くにはその居間を通り抜けなければならなかった。
仕方なく操は視線を合わせないようにして声を掛けた。
「お風呂の栓を抜いておきますか？」
「ああ、そのままにしておいて……たぶん～ん、このあとぅ、汗を掻くから～、そのままにしておいて良いわよぅ♪」

振り返って答えた三咲は、艶めいた視線を操に絡ませて付け加えたのだった。
「操ちゃんたちもぅ、これからお愉しみよね～っ♪」
「そ、それじゃ……お、お休みなさい……」
微かに頬を染めた操は義姉の言葉をスルーして軽く頭を下げると居間を通り抜けたのだった。
そして、自分たちの寝室の戸のノブに手を掛けた操は些か緊張して一つ息を吐いた。
今朝、宿を出てから幸二の様子が可変(おか)しかった。いや、そういえば前の日も素っ気なかったような気がする。まさか……と、思いたかったが原因は他に思い当たらなかった。そして、未だあの問題は心の奥底に棚上げしたままだった。
覚悟を決めて部屋に入ると、しかし、幸二はいびきを掻いて眠っていた。彼は少しでもアルコールが入ると直ぐに眠ってしまうのだった。
拍子抜けしたような、ほっ、としたような微妙な心裡で操は幸二の横に身を横たえたのだった。正直に言えば、ほっ、とした思いが強かっただろうか。
棚上げしたままの問題の前に、昨夜、義兄に抱かれて拒めなかった自分の心を諌めなければ、これから幸二と生活してゆく事はできないだろう。先ずはそこからだ、と思い至ったそんな操の心裡を嘲笑うように、階下から明け透けな三咲の嬌声(こえ)が

聞こえてきたのだった。
その翌日も、翌々日も操は幸二から求められなかった。幸二以外に深い交際をした経験などなかった操は男の生理的な欲求に疎かった。
毎晩《スル》ものではないのだろうか？
実際、夜毎階下の兄夫婦の寝室からは三咲のあられもない嬌声(こえ)が聞こえてきていた。隣近所が離れているとはいえ操の方が不安に思える程の嬌声(こえ)だった。
しかし、だからといって自分から誘う事など操にできる筈もなかったのだが。

四日目になった。
映画を観るから先に入って……と言われて風呂を済ませた操は、また居間の手前で躊躇(ためら)っていた。二階の自分たちの寝室に行くにはこの居間を通り抜けるしかない。普通の映画を観ているだけなら軽く言葉を掛けて通り抜ければ良いのだが、今夜のそれはどうやらＡＶのようだった。操でもＡＶくらい観た事はあった。学園の友人の部屋でパジャマパーティをした折に、彼女の兄のＡＶをこっそり観賞した事も何度かあった。
しかし、今夜の問題はもう一つあった。どうやら居間で三咲が広一にフェラチオを

しているようなのだ。
知らぬ顔で通るのはどう考えても無理だった。しかも、躊躇(ためら)っていた操の気配を感じたのだろう、咥えたまま振り返った三咲と眼が合ってしまった。
「あ、あの……お風呂、お先にありがとうございました……」
仕方なくそう声を掛けて足早に通り抜けようとした操に、三咲は《逸物》を吐き戻して言ったのだった。
「ちょうど良かった、操ちゃん……少しの間、代わってくれる？」
「は、はいぃ？」
聞き間違いだろう。そう思って訊き直そうとした操を三咲が手招いた。まるで見えない糸に操られでもしたように、よろ、よろ、と近寄った操の手首を掴んで隣に跪かせると、三咲がより具体的な言い方をした。
「わたし、この人の水割りを作ってくるから……その間だけ、萎えちゃわないようにしゃぶっていて欲しいのよぅ……」
「ひぃいっ!?」
視線の先に義姉の唾液で、ぬる、ぬろ、になった《逸物》が反り返っていた。
「だ、だって……あ…の…その……あ、ああ…それじゃ、水割り…水割りを、あ

たしが作ってきます…から…」
　気づいた解決策を口にだして、それに縋るように立ちあがろうとした操を三咲が笑いながら遮った。
「だ～め、だめ～っ！　この人ってば水の分量にすっごくうるさいのよぅ……だから、わたしでないと、絶対に無理よ、むりぃ……それにぃ、本気のおふぇらでなくて良いのよぅ……ちょこっとね、萎えない程度にしゃぶってくれてれば良いのぅ♪」
（そ、そんなコト言ったって……）
　どうやって断れば角が立たないだろう。そう思い悩む操に義姉は呆気らかんと言ったのだった。
「良いじゃない、おふぇらなんてぇ　挨拶みたいなモンだしぃ♪……それに、ほら……こないだの旅行の時は、わたしが幸二くんのおちんちんをしゃぶらせて貰ったじゃない？　……だから、そのお返しだと思ってくれれば良いのよぅ♪」
「お、お返し……って……」
（う、嬉しくないんですけどぉ！）
　操はあからさまに厭そうな顔をして見せたのだが、三咲は意に関せずという顔で更に挑発するように言ったのだった。

「それともぅ、操ちゃんっておふぇらはあんまりぃ……得意じゃないのぅ？」
勿論、得意ではない。いや、寧ろ嫌いだった。そんな操の心を見透かしたように三咲が言った。
「だめよぅ、操ちゃん？ ……男の人って、みぃ～んな おふぇらされるのが、だ～い好きなのよぅ♪」
そして、三咲は夫を振り返った同意を求めた。
「そうよね、あんた？」
「そりゃあ、まあ……そうだがよぉ……」
突然振られた広一が曖昧に頷くと三咲が決定的な言葉を吐いたのだった。
「なによぅ、あんたってば操ちゃんにおふぇらして貰うの、厭なのぅ？」
その言葉で『義兄の主観』に置き換えられてしまった操は断る為のイニシアチブを失ってしまったのだった。
そして、三咲はさっさと台所へ向かってしまい、取り残された操に義兄が言ったのだった。
「悪いな、操ちゃん……ちょこっと咥えてくれやっ！」
そう言われてしまっては、最早、回避する為の手立ては皆無に思われた。

広一の両手で頭を掴まれ義姉の唾液で、ぬろ、ぬる、になっていた《逸物》を突きつけられた操は観念して両目を瞑り口を開くしかなかった。

「んぶぅ……むぶぶぅ……んぐっ……」

広一の固く反り返った《逸物》を喉奥まで突き挿(い)れられて、操は嘔(えず)きそうになって必死に堪えた。
『ちょこっと、萎えない程度にしゃぶってくれてれば良い』と言った三咲の言葉など何処吹く風で広一が腰を振り始める。
「おぶぅ、んぐぅ……はぶぶぅ、んぶぅ……んんっ、ぐぶっ、うぶっ……」
喉奥を抉られる苦しさに吐き気を堪える操の咽頭の筋肉が収縮を繰り返し、広一に得難い快感を齎(もたら)していた。
「おほぉうっ♪……操ちゃんの喉、気持ち……エエ～っ♪」
更に、ずこ、ずこ、と喉奥に突き挿(い)れられて操の目尻に涙が滲む。
「ぐぶぅ……げぶっ!?……お、お義兄(にい)ふゃん……ま、まっへぇ!?」
必死にその身体を押し戻そうと抗う操の苦しげな様子に漸く気づいた広一が腰を止めた。
「お、おおっ……悪(わり)い、わりい……操ちゃんの喉の奥がよぉ、すっげえ絞まって、気持ちエエの何のって……つい、むきになっちまった……」
「……ぐふっ!?……えほっ、けほっ……」
しかし、嘔(えず)きが治まれば直ぐにまた《逸物》を突きつけて広一が催促する。

「そんじゃ、軽くしゃぶってくれるだけで、良いからよ？」
「……うう……はむっ……ちゅる、えろっ……」
頭を掴まれたままの操はまた咥えるしかなかった。
「先っぽをよ、ベロで舐め廻すようにしてくれや……」
膨れあがった先端を舐める舌先に、ぬるっ、とした感触がして操は思わず怖気を振るった。
（ううっ！……き、きぼち、悪いぃ！）
呼気と共に鼻先に抜ける異臭にも吐き気が込みあげる。
（な、なんで……あ、あたしが…こんな…コトっ！）
操は両目をきつく瞑って《それ》を幸二のモノだと思おうと努めた。毎週のように幸二の部屋でした〝二人だけのサークル活動〟での《課外活動》に重ね合わせると少し気持ちが楽になった。口腔を占領する血管の浮いた《それ》は太さも硬さも何処となく夫の幸二のモノと良く似ていた。
「……ちゅぷ、れろっ……あむぅ、りゅろっ……ちゅるっ、れりゅっ……」
いつの間にか熱心にしゃぶり始めた操を広一は満足そうに見降ろしてほくそ笑んだ。そして、操の髪の毛を優しく梳いてやると、彼女の舌も嬉しそうに答える。得意では

ないし好きでもなかったが、毎週のようにしゃぶっていれば彼の弱い処は織り込み済みだった。
「ぢゅるぅ、じゅぶるっ……はふっ……れるっ、るろぅ……ちゅぷっ、くりゅ……」
裏筋から亀頭の括れをなぞりあげると《逸物》が、びく、びくんっ、と震えた。
「あ～ら、あんた気持ち好さそうね？」
その時、頭の上から聞こえてきた声に操が我に帰る。
（や、やだっ！……幸ちゃんのじゃなかったっ！）
慌てて《逸物》を吐きだそうとした操を背後から抱きすくめるようにして三咲が笑いながら言った。
「良いのよ……続けて、つづけてぇっ♪」
「んんっ……ううんっ！」
行為を終わりにしたくて身を捩る操の頭を押さえて三咲が尚も言った。
「あんた、もう少しでイキそうなんでしょ？……操ちゃん、フィニッシュまでお願いねっ？……バキュームみたいに吸って、すってぇ♪」
（い、厭～っ！……やだ、やだっ！……フィニッシュって……く、口に射精(だ)さないで～ぇ!?……あれは、イヤーっ!?）

それは操に、数日前の宿屋の薄暗がりの中での行為を思い出させてしまった。口腔に義兄の〝精〟を吐きだされて、それを嚥下させられた時のおぞましさも同時に脳裏に甦っていた。

（お、お願いぃ!?……口に射精(だ)すのは、厭〜っ！……あれは、イヤーっ!?）

しかし、背後から三咲に、前から広一に頭を固定されて身動きもならない操の喉の一番奥で《逸物》が、ぶるんっ、ぶるるんっ、と震えていた。

「おぶぅ!?……んんっ、ひは[いや]ーっ!?……ぐぶっ、うぶぅうっ!?」

喉奥を穿つ熱い迸りに両目をきつく瞑った操の口腔を満たした粘着質の体液が、呼気と共に生臭い臭気となって鼻に抜ける。

（い、厭――っ！……き、きぼち、わるいぃ〜っ!?）

嫌悪感に身を捩る操に、三咲が追い討ちを掛ける。

「ごっくん、してあげて……ねっ❤」

「ひは[いや]っ!?……んぅっ、ひは[いや]ーっ!?」

必死に首を左右に振ろうとした操の頭は二人の手指で固定されていて、拒否の意思を伝える事、能(あた)わず。

「ほうら、操ちゃん……ごっくん、ねっ❤」

繰り返して義姉に促されては、操は絶望感に苛まされながら《それ》を呑み下すしか術はなかった。
そして、苦しげに嚥下する操の背を擦りながら三咲が囁いたのだった。
「この人のおちんちんって、すぅ～ぐ、浮気したくなる〃困ったちゃん〃だから～……溜まってるようだったら、時々で良いから 抜いてあげてねっ♪……操ちゃんなら家族だしぃ、わたしも安心だから……ねぇ♪」
しかし、義姉の言葉など耳に入らなかったのか操が口元を押さえて居間から逃げるように出てゆくのを見送って、三咲は夫を睨みつけて言ったのだった。
「良い事、あんたっ！……幸二くんとわたしが留守の間……あんまり 好き勝手して操ちゃんを泣かすんじゃないわよっ！」
「へん、言ってろよぉ！……オメエだって、向こうで幸二とヤリ放題だろうがっ！」
「くぅうっ……」
夫の指摘に悔しそうに唇を噛んだ三咲は、ふと、鼻先で笑うと挑発するように言い返した。
「そうね～っ♪……むら、むら、したら～ あっちに居るぅ昔の男を呼びだしてぇ、慰めて貰おう……か・し・らっ❤」

「なっ！……お、オメエっ！…そ、それは ダメだっ!! ……こ、幸二なら…ゆ、許すが……ほ、他の男は、ダメだっ!!」

珍しく動揺したように言い募る夫を三咲は可笑(おか)しそうに見返した。

何だかんだ言っても夫が自分に（いや、自分の身体に）惚れているのを三咲は知っていた。それに、三咲にとっても広一の《持ち物》が一番だった。だから、『三咲の義弟に対する想いも〝浮気心〟にまでは進展しない』事を、広一も三咲もお互いに判っていたのだった。

「だったら、あんたも程ほどにするのよっ！ ……良いわねっ！」

三咲は念を押すようにそう言ってから広一の身体を跨ぐと笑いながら続けた。

「まあ……二、三日はそんな気にならないようにぃ……今夜はスッカラカンにぃ、抜いてぇ、あ・げ・ま・しょ・う、ね～っ❤」

翌日、幸二と三咲は買い付けの為にヨーロッパへと旅立っていった。

今まで広一がしていた買い付けは幸二が担当する事になり、買い付けルートや仕入先の引継ぎと慣れるまでは通訳も兼ねて三咲が同行する事になっていた。

一方、今まで三咲がしていた店舗の管理と店番は操が、広一は販路拡張の為に県内

のデパートを廻る事になっていた。
しかし、新婚まもない夫と〝訳ありな義姉(だと確信していた)〟とが二人旅する事に操は苛立ちを隠せなかった。

いや、それ以前に、こちらも〝訳ありな義兄(とも言える)〟と二人きりになってしまう事の方が問題だっただろうか。夫が戻るのは二週間も先なのだ。それまで何事も起こりませんようにと操は祈る思いで店のシャッターを開けたのだった。
その店先に向かいの公園から桜の花びらが風に乗って舞い落ちてきていた。それを

箒で掃き清めながら、夜は早めに自分たちの寝室に引きあげるのがベターだと操は考えていた。何しろ一番近いお隣さんまで数十メートルは離れていた。悲鳴をあげたくらいでは救いの手など期待できそうになかった。いや、そんな事態に陥らないように祈るばかりだった。

しかし、その夜も次の夜も、彼女の不安を尻目に、広一は翌朝が早いからと早々に寝室に引きあげていって、逆に操は拍子抜けしてしまった程だった。それは、出掛ける前の晩に三咲が『スッカラカン』に抜いていった……からでは、勿論、無かった。広一なりの作戦だったのだが、操はすっかり安心しきってしまったのだった。

二人が旅立ってから四日目、三咲からＥＭＳ(国際スピード郵便)で荷物が届いた。荷物といっても薄っぺらな封書だったが。外廻りから戻った広一にそれを手渡してから伝票の品名に『カタログ』と書かれていたのを思い出して操が訊いた。

「お義姉(ねえ)さんから航空便ですよ……何か急ぎの商品とかですか？」

受け取った広一は途端に顔を綻ばせて答えた。

「おお、これな……待ってたのよっ！」

義兄と夜は二人きりになってしまう事に初めは警戒心もあった操だったが、三晩何

事も起きずに気が緩んでいた。だから、広一から夕食後に三咲の送ってきたＤＶＤを一緒に観ようと誘われても殆んど警戒していなかった。

「それじゃあ、急いでお夕飯の仕度をしますね♪」

てっきり紹介ビデオの類いだと思い込んだ操が、いそいそ、とエプロンを掛けて台

所に向かうその後ろ姿を、義兄が爬虫類のような眼つきで見詰めているのに彼女は気づかなかったのだった。

そして、夕食を済ませてから広一に続いて風呂からあがった操はそれでも、きっちり、とパジャマを着込んで居間に顔をだした。いつもの甚平姿の広一はソファーの前のテーブルにウイスキーセットを並べて先に飲み始めていた。

「遅(おせ)えよ、操ちゃん……って、女の長風呂はアイツもそうだがよぉ……」

「ご、ゴメンなさい……先に観ていてくだされば良かったのに……」

「そうはいかねえって……まあ、取り敢えず一杯、な？　……烏龍茶割りだし　ウイスキーは少なめにしといたからよっ♪」

上機嫌で広一が差しだした烏龍茶割りのグラスを受け取った操は、風呂あがりの火照った肌がその氷の浮かんだグラスの誘惑に抗し切れなかった。

「……あっ……冷たくて、美味しいっ♪」

仄かにウイスキーの香りはしたが義兄の言うとおり殆んどアルコール分は感じられなかった。グラスを傾けて一気に半分ほど飲んだ操を満足気に見遣って、広一は平ったい紙ケースから取りだしたディスクをプレーヤーのトレイに入れながら、ふと、思

い出したように訊いた。
「や、しまったっ！……操ちゃん、スウェーデン語って判るかい？」
「わ、判りません……よぉ！」
スウェーデン語どころか英語だって苦手である。てっきり何かの紹介ビデオの類いだと思い込んでいた操は頬を膨らめて抗議の意思を表したのだが、広一はニヤけた笑いを浮かべて答えたのだった。
「ま、まあ……俺が翻訳してやっても良いが……言葉なんぞ判らなくてもイイか？」
その義兄の言葉の意味は直ぐに理解できた。
尤もらしい横文字のタイトルが終わるといきなり《それ》が眼に飛び込んできたのだった。
「お、お、お、お義兄(にい)さんっ!?……や、や、やだ、これぇっ!?」
操が絶句したのも無理からぬ話だった。
何の脈絡もなく画面に映しだされたのは《男根》を咥えて舐め廻す金髪美女のアップだったからだ。
「ＡＶくらい観たコトあんだろぉ？」
「でも……でも、これ……も、も、モザイクが……」

しかも、所謂『無修正』という代物だった。
「あっちのヤツは普通に無修正だからよぉ……操ちゃんにフェラチオの参考にして貰おうと思ってな フェラの多いヤツを探させたんだぜっ！ ……モザイクなんぞあったらよぉ、舌ベロの使い方とか、判んねえしなあっ？」
「ひぃ……!?」
操はこの三晩何事も起こらずに気が緩んでいた事を激しく後悔したが、後の祭りというものだった。
「今な、彼女は『凄く硬くなってる』って言ってる……いや、別に翻訳しねーでも観てりゃあ判るし……ええか？」
「は、は、はいぃ……だ、大丈夫…ですぅ……」
何が『大丈夫』なのか、改めて自分の言った言葉の意味する処に気がついた操は頬を真っ赤に染め視線を泳がせた。そして、焦りを隠すように手にしていた烏龍茶割りのグラスを傾けたのだった。
そんな操の手元を、ちらっ、と見遣って広一はほくそ笑んだ。その烏龍茶割りには僅かに媚薬を混ぜておいたのだ。輸入小物を扱っている関係で『そういう需要』はそれなりにあった。勿論、あまり大っぴらにして本業に差し障っても困るので極々内密

に上得意様にだけ融通していたのだが。それに、今夜混ぜた量はほんの僅かで精々身体が火照る程度だろう。広一は混ぜる量を毎晩少しずつ増やしていって、いずれは身体が疼いて仕方ないようにするつもりだった。

（まあ、今夜はしゃぶらすトコまでいけば上出来だがな……）

そんな思惑をひた隠して広一は何気に話題を振った。

「今は幸二もよぉ、新婚ラブラブだからな～っ？ ……操ちゃんのマンコに 突っ込んでるだけで気持ちイイかもしんねーけどよぉ……」

「お、お義兄(にい)さん……」

幾ら家族になったからといって、こういう話題を平然と話せる程の経験も図太さも操は持ち合わせてはいなかった。しかし、広一は画面に視線を向けたまま操の抗議にも気づかないように話を続けた。

「…だからよ、マンネリになった時にフェラで勃たせてやるのが妻の務めってモンだと俺は思うのよっ！ ……それに、ミサはよぉ……フェラだけは 今までの女で最高だからよぉ♪」

何故そこで義姉の話になるのか判らずに思わず広一を振り返った操に、笑いながら彼は言ったのだった。

「……まあ、あっちで幸二がアイツのフェラに慣れちまうのも心配だしよぉ♪」
「そ、そんなコト……する訳……ない……」
――と、操は思いたかったが、同時にきっと《する》だろうと思った。しかも、広一が追い討ちを掛けるように言ったのだった。
「いや、俺がミサに言っといたから……幸二が溜まってるようなら、抜いてやれってよぉ……」
「お、お、お義兄(にい)さんっ？ ……な、何てコトっ!?」
「――んだよぉ？ ……変な商売女とするよりも、アイツなら 家族だしよ……操ちゃんだって安心じゃねえかよぉ？」
そう言われて操は思い出した。出掛ける前の晩、三咲が言った言葉を。
『この人のおちんちんって、すぅ～ぐ、浮気したくなる〃困ったちゃん〃だから～……溜まってるようだったら、時々で良いから 抜いてあげてねっ♪ ……操ちゃんなら家族だしぃ…わたしも安心だから……ねぇ♪』
勿論、冗談だと思っていた。いや、思いたかった。しかし、あの晩、操は義姉の見ている前で『抜かされた』のだった。つまりそれは、向こうの二人も同様だと、暗に三咲は言っていたのに違いない。

「おお、これ、これっ！……操ちゃん、判るか？……これがな『ハモニカ』っつう技よぉ！」
いきなりＡＶに話題を戻されて厭でも視線を向ける。
「……チンポの竿んトコをよ、横咥えにしてな……唇をハモニカ吹くみてえに滑らすのよ……これが、気持ちエエんだっ！」
しかも、頼みもしないのにリモコンで巻き戻されて「ほれ、ここよ」とばかりに顔を覗き込まれては、操も画面を見詰めるしかなかった。
「そういやあ、いつだったか……幸二によぉ、ここでアイツとやってるトコを見られちゃってなあ……」
何故か広一は話題を、コロ、コロ、と変えた。だから操は、先程の広一が三咲に伝えたという『幸二が溜まっているなら抜いてやれ』発言への抗議の気持ちが、いつの間にか何処かへ追い遣られてしまった事にも気づかなかった。
「……おっとぉ、ズコ、バコ、始めやがったなあ……」
画面ではペニスを咥えていた金髪美女を男が押し倒して挿入するのが見えた。
「フェラじゃねえと、あんまり参考にもなんねーかなあ……」
広一がそう呟きながらリモコンでチャプターを送ってゆく。

「……おお、次の女もけっこうイイ女じゃねえかっ♪……どれ……フェラは……」
ピクチャーサーチで目的の場面まで送ると操を振り返って尤もらしく言った。
「ほら、操ちゃん……良く観て勉強しようなっ！」
「……うう……」
曖昧な声を洩らして操は画面に視線を戻した。何故、さっさと席を立って居間を出ていかなかったのか。操は後々になっても自分でもその理由が判らなかった。勿論、酷く後悔する破目になるのだが。
広一はＴＶ画面を観ている振りをしながら注意深く操の様子は観察していた。両手で握り締めた烏龍茶割りのグラスは既に空になっていた。部屋から逃げだそうと思えばできた筈だった。けれど操はソファーの隅に（勿論、広一からは可能な限り距離を取っていたが）坐ったまま、困ったような顔で、ちら、ちら、と画面に視線を向けていた。そして、操が先程からパジャマを着込んだ膝頭を、もじ、もじ、と擦り合わせ始めているのにも広一は気がついていた。
（そろそろ……効いてきた、かな？）
「さっきの話だがよ……」
「えっ？」

またも脈絡もなく話を振られて広一を見返した操の頬は朱に染まり、心なしか瞳も蕩け始めているようだった。
「ほれ、幸二に見られちまった話よ……」
「あっ……は、はい……」
またも曖昧な返事を返す操の視線は、ＴＶ画面と広一の顔と床の絨毯とを、うろ、うろ、とさ迷っていた。
「ここでミサにしゃぶらせてたんだがよ……幸二が、そのフェラしてる口元を食い入るように見てるもんだから……おお、操ちゃん、これだぜ、これっ！」
突然、広一がＴＶ画面を指差した。
「フェラの基本はよぉ、こういう風に下から見あげてな、相手の眼を……つまり幸二の眼を見詰めながらするんだぜっ♪」
画面に眼を向けると、正しく男目線のカメラアングルで、男の《モノ》を舐め廻しながらもブロンド美女の視線は艶かしくカメラに向かって絡んでいた。
「……でな、ミサのヤツが可哀想に思ったのか幸二に『してあげようか？』って聞いたのよ……勿論、半分くれえは冗談だったんだろうが、俺が頷いてやるとミサもその気になってな……幸二をここに、俺の隣に坐らせて抜いてやったのさ……家族思いの

イイ話だろう？」
（ち、ちっとも『イくない話』……ですぅ～っ！）
「だから俺は思ったのよ…」
操の心の内の抗議など露ほども気づかずに広一が話し続ける。
「…ほれ、アイツらが出掛ける前の晩に 操ちゃんにフェラして貰っただろ？ ……正直言って、まだまだ、だしなあ？ ……ここは操ちゃんを 少しでもミサのレベルに近づけるように、特訓してやらねえと……ってな？」
そう言いながら甚平の下を脱ぎ始めた広一に、操は頬を染めて視線を逸らすしかなかった。まさか……と思っても、広一の意図は他に考えられなかった。
「ほれ、遠慮はいらねえからよぉ……《これ》で練習してみろよっ！」
案の定な言葉と共に操の顔の前に広一の《逸物》が突きだされていた。
「だ、だ、だ、だってぇえっ!?」
（や、やだ……あんなに大(おっ)きくなってるぅ!?）
視線を泳がす操の前で、黒々と淫水焼けした《自慢の逸品》を、ふり、ふり、と揺すって広一は笑いながら言った。
「何事も、慣れだぜ、慣れっ！」

「やっぱさ、幸二にゃ幸せになって欲しいしよぉ……可愛い新妻が積極的にフェラしてくれたらこんなに嬉しいコトはねえだろっ？」
「で、で、で、でもぉうっ!?」
ソファーから腰を浮かせ掛けて逃げ腰になる操の頭を掴んで広一が少し照れたように言った。
「いや、ホントいうとな……ＤＶＤ観てたら俺もちいっとな、むら、むら、しちまってよぉ……だからよぉ、操ちゃんがしてくれりゃあ、一石二鳥っつうか……操ちゃんも練習になるし、俺もスッキリできるしよぉ？」
（そ、そ、そんなコト……い、言ったって……）
尚も逡巡する操の頭を掴んだまま広一が言葉巧みに誘導する。
「遠慮なんかしなくて良いんだぜっ！」
（し、してませんっ！……遠慮なんか～っ！）
口にだして言える筈もなかった。操の夫は幸二でも、この家の『家長』は広一であり、彼女は（いや、幸二も操も）彼に養われているのが現実だったからだ。
そして、数日前の晩のように頭を両手で掴まれて口の前に、いや、唇に《逸物》の先を押しつけられた操は両目を瞑って口を開くしかなかった。

「んぶぅ……むぶっ、んぶぶぅ……んぐっ……」
まるでそれは数日前のあの晩の再現だった。違っていたのは、今夜は幸二も三咲も既に家には居ない事だった。
何故、自分は義兄のこの強引とも思える行為を拒否れないのだろう。しかし、自問する自分の心の奥深くからその答が浮きあがってきたような気がして、操は我知らず背筋を慄(おのの)かせた。あの小旅行の二日目の宿で、義姉と勘違いした広一に操は抱かれてしまった。あの夜、義兄を拒めなかった自分の心の奥底にわだかまる思いが頭を擡げてくる。義兄の乱暴で強引な愛撫に昂ぶらされた自分の身体が、最後の一線まで受け入れてしまった事実は操の心と身体に深く刻まれていた。しかもあの夜、夫の幸二との行為では得られなかった官能の昂ぶりを覚えてしまった身体の疼きが甦っていた。
そして、そんな操の葛藤を見透かしたように広一が言葉を掛ける。
「操ちゃん、安心していいぜぇ！……俺のチンポで練習したこたあ、勿論 内緒にしておくからよぉ？」
義姉はともかく夫の幸二に知られるのは、勿論困る。しかし、『内緒にする』と言われるのは、まるで今から《する》行為が人目を憚る恥ずべき行為に思われて（いや、

実際そうだが）、操はまたも背筋が凍る思いがした。
「ほれ、画面を観ながら取り敢えず同じようにしゃぶってみようぜっ♪」
あっさりと咥えさせる事に成功して気を良くした広一が腰を、つん、つん、と突きだして促した。
「……はむっ……んむ、ちゅるっ……あふっ、じゅるっ、じゅぶぅ……」
操の舌が躊躇（ためら）いながら動き始める。
「もっと、唾液をな、口ん中にいっぱい溜めて、それをチンポに塗り広げるようにしてみろや……」
「……んぅ……んぶっ、むぶぶぅ……じゅぶぶっ、ぶじゅっ……」
厭で堪らない行為を、言われたままに実行する自分の唇から卑猥な水音が零れる。
（うう、いやあっ！……いつまで、続けなくちゃいけないのぉ？）
勿論、数日前のあの晩のように義兄がイクまで終わらないのは判っていた。
暫くそうして画面を観ながらしゃぶらせていた広一だったが、単調な前後動を繰り返すだけの操に些か焦れたようにその頭を軽く叩いて言った。
「操ちゃん、悪いけど坐らせて貰うぜ……」
操の口から《逸物》を抜き取った広一はソファーに腰を降ろして、大きく開いた股

の間に顎を杓って促した。
「操ちゃんも、ここへ……俺の股の間に坐ってよ……おお、そんでよぉ……いつもはこうやって……」
広一は左足を操の背中に廻してＴＶ画面に向かって半身になると、絨毯に腰を落とした彼女の足の間に右足を降ろした。
「操ちゃんも、もうちいっと横向かねえとＴＶが見えねえだろ？　……そんで　足も開いてな……」
そして、何気に足先を押し込むと、丁度操の股間に足指が触れていた。
（……や、やだっ!?……あ、あそこに……あ、足がっ？）
偶然だろうか。躊躇(ためら)うように退いた操の腰は、しかし、広一の左足で押し戻されていた。
「あ、あの……お義兄(にい)さん……あ、足…」
控え目に訴えた言葉は、しかし、広一の声に遮られてしまった。
「それじゃ、『特訓』の再開な？　……ほれ、待たせたな、もう咥えて良いぜっ！」
まるで咥える事を彼女が待ち望んでいたような言われ方に些か憤慨した操は、義兄の足先の微妙な位置取りへの抗議の気持ちをまた逸らされてしまった。

「さっきのハモニカ、覚えてるか？……あれ、やってみろや……」
「……ふぁい……え、えっと……じゅぶっ、んぶぶぶぅ…こほ、れふか［こう、ですか］……むぶぶっ、じゅぶるるぅ……」
拒む事もできずに横咥えした《幹》を吸いながら左右に摺らすと広一が腰を震わせて快感を伝えてきた。
「おぉうっ!?……き、気持ちエエっ♪……今度、幸二にしてやる時によ、その感じを忘れんじゃねえぜっ！」
望むと望まざるとに関わらず自分のしている行為が男に悦びを与えているという現実は、そのまま操の官能にも跳ね返っていた。自分でも無意識の内に腰を拗(くね)らせ始めた操は、股の間に押し当てられていた義兄の足指にパジャマの股間を擦りつけている事に気づかなかった。
（ちいっと、湿ってきてるなあ……）
広一は操に悟られぬようにほくそ笑むと僅かに足の親指を突きだした。しかし、今夜はまだ我慢だ、とばかりにそれ以上は自分からは動かさずにフェラチオに気持ちを集中させた。
「そろそろ、また咥えてくれや……見あげながらスルのを忘れずにな？」

「あ、ふぁあい……あむんっ……じゅずぅ、ずずずっ……」
「咥えたままでも、ベロは動かしてな……」
「ふぁい……れるぅ、えろっ……ちゅるっ、りゅろぅ、んちゅっ……」
いつの間にか見あげる操の瞳は蕩け始めていた。勿論、僅かに混入された媚薬の効果もあったのだろうが、操は行為に集中する内に夫の幸二にしているような錯覚に囚われ始めてもいたのだった。
口腔を占領する《存在感》も、聞こえてくる声も、毎週日曜日のたびに幸二の部屋で行なった〝二人だけのサークル活動〟での《課外活動》と重なっていった。
稚拙な操のフェラチオでも気持ち良さそうな嬌声(こえ)をあげる幸二に気づかれぬように、こっそり、スカートの中で指を蠢かせたのも一度や二度ではなかった。それを思い出したように指を股間に降ろそうとした操は《そこ》に足指の感触があるのに気がついた。
(あれ？　……幸ちゃんの足って……いつも、ここだっけ？)
蕩けた頭が正常な認識を結ばない。けれども、その足指にパジャマの股間を擦りつけると**非常に具合が良かった**。
(あんっ♪……こ、これ……気持ち、良いっ♪)

突きだすように立てた義兄の足の親指に無意識で股間を押しつけて腰を振る操を見降ろして、広一も協力を惜しまない。パジャマ生地の上から的確に《突起》を探り当てて親指の向きを調節する。

（やあんっ♪……あ、あそこが……気持ち、良いよぉっ♪）

「じゅぶぅ、じゅるっ……じゅずぅ、ずずずぶっ……ぢゅぶぶっ、じゅるぅ……」

舐めしゃぶっていた《逸物》をフィニッシュへと誘うような吸い立てる愛撫に変えて責め始めた操に、広一も快感の昂ぶりを訴えた。

「ほおぅ!?……操ちゃん、そろそろ、射精(だ)すぜぇ！」

頭の上から降ってきた声に、唐突に我に帰った。

（やだあっ！……こ、これ……幸ちゃんのじゃなかったっ！）

しかし、気づいた時は既に遅かった。自分の喉奥で義兄の《逸物》の先端が膨らんで、びく、びくっ、と震えているのが判った。操の喉はその感触を覚えていた。

（厭、いやっ、やだ～っ!?……ま、また、今夜も……く、口の中に 射精(だ)されて……の、呑まされるのぉっ!?）

必死に顔を左右に振って《逸物》を吐きだそうと抗う操の頭を押さえつけて、広一はその喉奥に突き挿(い)れたまま腰を震わせていた。

「おほぉうっ!?……で、射精(で)るううううっ！」
「ひは[いや]っ!?……んんぅ、ひは[いや]ーっ!?……ゆふひへぇええ[許してぇええ]っっ!?」
必死に義兄の身体を押し返して許しを請おうと抗う操の願いは、勿論、叶えられなかった。
「おぶぅ、ぐぶっ!?……ひはあ[いやあ]っ!?……んぶぅ、んぶぶぅっ!?……ぎぼひ、わりゅひぃいい[気持ち、悪いぃいい]っ!?」
またも喉奥に射精(だ)された熱い迸りに操が絶望感に苛まされて両目を瞑った。
「わ、悪(わり)ぃ……あんまり気持ち好かったんで、つい……だけどよぉ、絨毯汚すとアイツ怒るしよぉ……呑んでくれよな？」
拒む言葉を口にする前に義兄に先手を取られて操は観念するしかなかった……だろうか。いや、どちらにせよ広一は掴んだままの操の頭を離す気はなかったのだが。

次の夜も、外廻りの仕事から戻った広一に先手を取られてしまった。
「今夜はよぉ……《和モノ》を手に入れてきたでよぉ……やっぱ、言葉が判らねえと、操ちゃんもイマイチ乗りも悪(わり)いみてえだったからなあ？」

セカンドバックからＤＶＤのトールケースを取りだして自慢げに笑う広一に操は返す言葉が見つからなかった。

夕食後、昨夜のように風呂からあがった広一は操を風呂場に追い遣ってウイスキーの準備に取り掛かった。そして、操の為の烏龍茶割りを作って例の媚薬を垂らそうとした広一は、ふと、思い直したように手を止めた。

（昨夜（ゆうべ）は思ったより簡単に咥えたよなあ……）

勿論、媚薬の効果で操の頭が蕩けていたからこそ言い成りになっていたのは確かだろう。しかし、媚薬を使わずに〝堕とす〟方がもっと面白いのではないか、と広一は思い直したのだった。

（それが、《調教》ってモンだよなあ？）

広一は黒い笑みを浮かべて媚薬の入った小瓶を棚の奥にしまい込んだのだった。

■中略■

二日目も同じように《フェラ＋ごっくん》させられて……

三日目、行為は更にエスカレートしてゆく。

夕食後、風呂からあがった広一は甚平の前をだらしなく開(はだ)けて台所に入ってきた。しかも、下半身は素っ裸のままで、ぶら、ぶら、させていた。
「お、お、お義兄(にい)さんっ!?……な、何て格好でっ!?」
「ううん？……ああ、最近は遠慮してたが、風呂あがりは俺はいつもこうだぜ？……それによ、どうせ直ぐに脱ぐんだし、俺は気にしてねえからよぉっ！」
(あ、あたしが……き、気にする……んですぅ！)
「それより、早(はえ)えトコ風呂入ってこいや……今夜も『特訓』始めるぜえっ！」
広一の巧みな言葉のマジックで主観を置き換えられてしまった操は反論する言葉を失って、すご、すご、と風呂場へ向かうしかなかった。
そしてその夜も、あたかもローテーションのように『特訓』は進み、お掃除フェラをさせている操の頭をさすりながら、広一がソファーの隣を、ぽん、ぽんっ、と叩いて言ったのだった。
「操ちゃん、ちょっと、ここに坐ってみろや？」
訳が判らず小首を傾げる操に広一が大真面目で続けた。
「流石に三日も続けてよぉ……俺だけ気持ち良くして貰っただけってのは、申し訳ねえしよぉ？」

「ふぇええっ？」
「いいから、ほれ……」
操を引っ張りあげるように自分の隣に坐らせると、その股間を覗き込むようにして広一は言ったのだった。
「大丈夫だって、ナンも心配いらねえぜ？　……ほれ、パジャマまで ぐっしょり濡れてんじゃねえかよ……」
「だ、だ、だって……お、お義兄(にい)さんが……あ、足で…弄って…た……から……」
昨夜と同じようにフェラチオしている間中、広一は操の股間を足指で弄り続けていたのだった。漸く義兄のしようとしている《行為》を朧げながら理解した操が、当然のように逃げ腰になる。
「あ、あ、あ、あたしは……べ、べべ、べ、別に……」
「しかしよぉ……このままじゃ、火照って眠れねえだろう？」
またも広一が〝悪魔の囁き〟を操の耳元に送り込む。実際、操は昨夜、身体が疼いて中々寝つけなかった。
「ちいっと、眼をつぶってりゃあ、エエのよ！　……気持ち良くしてやるからよっ！」
耳元でそう囁かれて慌てて両目を瞑った時点で操の負けだった。パジャマの中に侵

入してきた指先が、あっさり、とショーツも潜る。
「あっ、ダメっ！……いんっ、いあぅっ！」
閉じようとする操の両腿の間に広一が膝を突っ込んできて、慌てて義兄の手首を掴んで腰を退こうとしても最早逃げ道はなかった。そして、ショーツに侵入した二本指が鵐（しとど）に濡れた下草を掻き分けて《膣口》の粘膜を弄（まさぐ）り始めると、操の身体の方がそれを受け入れてしまった。
いや、その多少乱暴で強引な義兄の指の感触を操の身体が覚えていた。その節くれだった指に官能を昂ぶらされた記憶が蘇る。
（やだ、どうしよぉ？……お、お義兄（にい）さんの指ぃ……き、気持ち良い！?）
ショーツの中で蠢く義兄の指先が、じゅぽっ、じゅぷっ、と卑猥な水音を撒き散らし、その羞恥の思いが操の官能に跳ね返る。
両目を瞑って官能に蕩けた顔を晒す操の唇が呼気を求めるように寛いで、薄桃色の舌先が誘うように覗いていた。広一は、にまっ、とほくそ笑むと迷いも見せずにその唇を奪い、舌先を吸い、唾液を混ぜ合わせた。
「はふっ…（ちゅぷっ、えろっ、れるぅ）…はむっ…（りゅろっ、れりゅっ）…」
唇を吸われ、舌を絡めて口腔を弄られるとそれだけで操の身体から力が抜けてゆく。

（んんっ？……ダメ～っ？……あたしぃ…お、お義兄（にい）さんに……んんっ……き、キスされてるぅ!?……やだ、やだ、ダメなのにぃ……き、キスされるとぉ…あ、あたしぃ!?）

初めは拒むように広一の胸に宛がっていた操の両手が彼の首に巻きついてきて、自分から唇を吸い唾液を絡め始めていた。

（そういやあ、コイツ……キスに弱かったよな？）

広一はニヤけた笑みを洩らして舌を絡め水音を立てて口腔を責め立てながら、そろり、と両手を下げて操のパジャマごとショーツを摺り降ろしていった。

「……んっ？……んんっ、んぅっ……」

義兄の行動に気づいた操が身を捩ったが、唇を吸われ続けて蕩けていた彼女の抵抗は殆んどお座なりだった。あっさり膝まで摺らした広一はショーツに足を引っ掛けてパジャマごと足首まで摺り降ろして抜き取ってしまった。

「……ああっ……やっ、ダメっ！」

両膝を左右に押し広げられた操は眼を瞑って広一にしがみついた。まるで、何も見ていない、何も知らない……とでも言わんばかりだった。

曝けだされた操の股間は鵐（しとど）に濡れて部屋の灯りに煌いていた。

いきなり、広一の二本指が《膣口》を潜る。

――じゅぽっ、じゅぷっ……にゅぽっ、きゅぷっ……ぢゅぷっ、きゅぽっ……

その二本指の挿抜に操の《膣口》が卑猥な水音を撒き散らす。

（や、やだ～っ!?……え、え、エッチな音……してるぅ!?）

暫くは馴染ませるように掻き廻していた指先の平が上向いて、膣前庭の粘膜を探るように弄(まさぐ)った。そして、直ぐにザラついた快感スポットを探り当てると広一の指先がそこを、くにゅんっ、と押し込んだ。

「いひゃあああっ!?……しょ、しょこぉ……ら、らめぇええええっ!?」

跳ねる腰と閉じようとする股を押さえ込んで広一が更に《そこ》を責め立てる。

「ここが……Gスポットが、エエんだろぉ?」

「あああ、やめっ……いぎぃいんっ♪」

否も応もなく跳ね踊る自分の腰に途惑いながらも、操は押し込むように《そこ》を弄られる指の感触に覚えがあった。《初夜の床》で同じようにはしたなく両足を開かされて弄られた指先で、初めての絶頂に昇り詰めさせられた記憶が蘇る。

「あひゃあっ、ひぐっ、いひぃ……んんっ、気持ち、イイんっ♪」

しかし、快感に身悶えて蕩け始めた頭の片隅に小さな『疑問』が擡げてくる。

(……だ、だって…あれ……あの時は、幸ちゃんが……)

勿論、それは心の奥深くに隠して置いた筈の『疑問』だ。いや、自ら暗黙の了解で棚上げして置いた『疑問』だったというべきだろうか。そして、その答えも操は自分で気づかぬ振りをしているだけなのを知っていた。

「お、お、お義兄(にい)さんっ！……そこおぅ……そこは、許してぇ～っ！」
身悶えながら許しを請う操の膣壁は、しかし、己の言葉を裏切って義兄の指を絞めつけていた。

四日目――。
最早、夕食後の定例行事のように居間のソファーに坐った広一がリモコンを操作しながら言った。
「このＤＶＤも毎晩観てると流石に飽きてきたなあ……また、明日にでも新しいのを仕入れてきてやらねえとなあ……」
「……そ、それじゃ……あ、あたし、今夜はもう……寝ま……」
何気に立ちあがろうとした操の手首を掴んで引き止めると、空かさず広一は大きく頷きながら言ったのだった。
「おお、そうだっ！……今夜は目先を変えてシックスナインなんて、どうよ？」
「ひぃいっ!?……だ、だだ、だってぇ!?」
あからさまに逃げ腰になる操に広一が笑い掛けた。
「レパートリーは増やすに越したこたあ、ねーからなあっ♪」

そして、操を立たせるとさっさとソファーに仰臥して促したのだった。
「ほれ、操ちゃんも早(はえ)えコト、パジャマのズボンとパンツを脱いで上に乗れってよ……ちいっと、狭いけえが、いつもアイツとやってるから、大丈夫だって……」
勿論、広一の下半身は初めからすっぽんぽんで、既に硬く反り返っていた。操はそんな義兄の《逸物》に、ちらっ、と視線を投げて困ったように俯いてしまった。さっさとその場を離れなかった操に非があったのだと言われても仕方ない状況だった。
案の定、操のパジャマの下に広一の手が伸びる。
「ほれ、さっさと脱げって……よぉ！」
「あぅ……お、お義兄(にい)さん……ちょっ、待っ…て……」
抗う操に構わず広一の手は素早くショーツごとパジャマを摺り降ろしていた。そのまま引き寄せられた操は、膝下に絡まったままのパジャマとショーツに足を縺れさせて広一の股間にダイブでもするように顔を埋めてしまった。
「うぶっ……わ、わきゃあっ!?」
「――ったくよぉ……操ちゃんって、結構ドン臭いのなっ？」
「……うぅぅ……」
「おしゃぶりの前によぉ……上に乗れってのぉ！」

まるで《逸物》に顔も唇も押しつけたような格好を揶揄(からか)われて、操は既に主体を奪われていた。
「……あぅうっ……あ、あの……お、お義兄(にい)さんの…か、顔を……ま、跨ぐ…んです…よね？」
「シックスナインくれえ、したコトあんだろ？」
（な、ないです……よぉ！）
勿論、口にだしては言えなかったが。身体を起こした操はソファーに仰臥する広一の顔の横に立って途惑いぎみに口を開いた。
「あ、あの……し、失礼して……ま、ま、跨ぎ……ます…ぅ…」
律儀に断りの言葉を述べてから、おず、おず、と義兄の顔を跨ぐ操の頬は真っ赤に染まっていた。
（……は、恥ずいぃ！）
しかし、狭いソファーの上に膝立ちで跨いだだけの操に広一の催促が飛んだ。
「もっと、腰を降ろさねえと舐めれねえだろがっ！」
「ご、ご、ゴメンなさいぃ!?……え、えっと……こ、こうですか？」
両尻を恥ずかしそうに、ふる、ふる、と揺すりながら降ろすと、直ぐに義兄の指が

秘唇に宛がわれて左右に寛げられてしまった。
「ひぃいいいっ!?」
「――んだよぉ？ ……もう、とろっ、とろ、じゃねえか？」
「そ、そ、そ、そんな……コト……」
否定の言葉は尻窄まりに消えて、同じ口から上擦った声が零れた。
「……あんっ……やあ…んっ……」

■中略■

この夜もまた同じように《フェラ+ごっくん》させられて、操も義兄の舌と指でイカされてしまった……

翌日、風呂場で身体を洗っていた操は、昨夜《あそこ》を義兄に執拗に舐められた事を思い出して何度も何度も《そこ》を洗った。そして、ふと、自分が今夜も舐められる事を想定しているのだと気がついてしまった。いや、期待していると言った方が正しかっただろうか。
（……き、期待なんか……し、してないぃ！）

しかし、その自分の心を裏切るように身体の奥で、じゅくんっ、と潤いが起こり、操は慌ててシャワーで股間を何度も洗い流したのだった。
そして、風呂からあがった操はいつものようにフェラチオの『特訓』の名目の下にしゃぶらされ口腔に吐精されて呑まされてしまった。更に、これまた至極自然な流れのままにソファーに坐らされていた。勿論、下半身はパジャマもショーツも既に脱がされている。ここまでは、最早毎晩のローテーションと化していた。
「あ、あの……お義兄(にい)さん……あ、あたしは……その……し、して…貰わなくても……いい…です…から……」
両膝を掴まれて大股開きさせられた股間を両手で隠して操が訴える。舐められる事よりも、既に、ぐっしょり、と潤っている《自分》を知られる事が恥ずかしかった。
しかし、広一は気づいているのかいないのか、平然と催促したのだった。
「ほれ、自分でマンコを広げてみせろやっ！」
「ひ、ひ、広げ…るうっ？」
瞬間湯沸かし器宛らに、ぼんっ、と音でも聞こえそうに真っ赤になった操が、ぷる、ぷる、と首を振る。
「なんだ？ ……やり方、判んねーのか？ ……マンコのビラビラ食みだしてるトコを

指で広げんだよぉ！」
（び、びらびら…ってぇ？　……は、は、食みだしてなんか……な、ないモンっ！）
しかし、義兄に『早くしろ』とばかりに顎をしゃくられて、操は視線を泳がせて両手指で、おず、おず、と秘唇を左右に寛げるしかなかった。
その途端、つぅ――――――っ、と《膣口》から愛液が《蟻の門渡(とわた)り》を伝い落ちていった。
（ひぃいいいっ!?……は、は、恥ずいぃ!?）
「おう、おう……びっちょ、びちょっ……だなあっ？」
「そ、そんな…コト……い、言わない…でぇ!?」
「そのまま広げとけよぉ？　……よっと、せい……」
そう命じてから広一は操の腰を手前に引いて更に折り曲げるように持ちあげた。所謂《まんぐり返し》である。
「わははぁ……ケツの孔まで垂れてるぜえっ！」
「いやああっ!?」
恥ずかしいなら隠せば良いのに操は命じられた言葉を守って己が指で秘唇を寛げたまま身を捩った。

（いや、いや、いやあっ!?……な、何で あたしぃ……お、お義兄(にい)さんに……さ、逆らえない…のぉ？）

「先にこっち(ケツの孔)から舐めてやるかっ？」

「やっ、いや――っ!?……お、お、お義兄(にい)さん そんなトコ……き、き、汚いから～っ!?……な、舐めちゃ……だ、だ、ダメ――っっ!?」

秘唇を左右に寛げた手指はそのままで義兄の舌から逃れようと身を捩る姿は、いっそ滑稽だった。

「――んだよぉ？…（れろっ、えろぅ）…風呂で 洗って…（ちろっ、れるっ）…きたんだろぉ？」

「あ、あ、洗った……んひぃ!?……けどぉ……やだ、ダメ～っ!?」

そもそもが排泄の為の《器官》である。その窄まりの皺を指先で広げられ舐め廻されて操は嫌悪感にも似た羞恥に身を竦めた。

（やだ、ダメ～っ!?……あ、あたしぃ、幸ちゃんにも……そ、そ、そんなトコぉ…な、舐められたコトないぃ!?）

というよりも、そもそも幸二にはまだクンニすらされていなかったのではなかったか……。いや、それよりも綺麗に洗ってあっただろうか、と操はその方が気になって

ならなかった。
「お、お、お義兄(にい)さん……許し…いひゃあっ!?……ゆ、許しへぇえぇっ!?」
「――ったくよぉ？ ……そりゃあ、早くマンコを舐めてくれって言ってんのか？」

■中略■

そのまま散々舐め廻されて……官能に蕩けた操はソファーに押し倒されてしまう。

それでも、《膣口》に《逸物》を擦りつけられて漸く我に帰った操が広一の身体を押し除けようと声を荒げた。
「や、やだ、ダメ～っ!?……お、お義兄(にい)さん、それは、ダメ～～っ!?」
しかし、広一は尚も食みだして、ぬる、ぬる、になった小陰唇に《逸物》を擦りつけながら言ったのだった。
「ちょこっとでイイからよぉ？ ……ちょこっと マンコの外側で擦ってもエエよな？……ほれ、つまり《素股》ってヤツよぉ……知ってっだろぉ？」
「だ、だ、だってぇ!?」
「大丈夫だってよぉ……外っかわで擦るだけだしよっ？ ……おおぅ マジで操ちゃん

のマンコ、ぬるっ、ぬる、で気持ちエエ～っ♪」
「おお、そうやって眼をつぶってりゃ、操ちゃんは何も見てねえ、何も知らねえ……心配いらねえってよぉ……こんだけ気持ちエエと、すぐに終わるでよ……」
「ひぃいいいっ!?……だ、ダメ～っ!?」
「ほおぅ……操ちゃんのマンコ……すっげえ、ぬる、ぬる、で滑って……おぉうっ、滑る、すべるぜぇ……」
何処まで偶然だっただろうか。いや、故意だったとしても既に遅かった。
「何も見てねえ、何も知らねえ……ちょこっと、滑ったけえが、すぐ終わるからよぉ……眼を開けちゃいけねえぜっ！」
（ひぃいんっ!?……だ、だ、だってぇえええっ!?）
平然と嘯(うそぶ)いて膣内(なか)で挿抜を始めた義兄に、操は拒む言葉が見つからない。いや、義兄の指と舌で散々昂ぶらされていた操の身体が《それ》を受け入れてしまっていた。
せめて、言葉の通り早く終わって……と操は念じるばかりだった。
「……んんっ……あん、んあんっ……お、お義兄(にい)さん……だ、ダメ～っ♪」
拒否る言葉とは裏腹に操の喉は快感に咽ぶ。

開(はだ)けられた胸元で操の双つの豊満な乳房が激しい挿抜に、たぷ、たぷんっ、と波打ってたわむ。
「いやあっ!?…だ、ダメ、ダメーっ!?…こ、こんなコト、ダメぇ〜っ!?…お、お、お義兄(にい)さんっ…いああっ、あああっ…ダメですぅっ!?」
必死に『ダメ』を繰り返す事で〝良心の呵責〟から逃れようとでもするように操が声を振り絞る。
「おおうっ！……エエ具合の、絞めつけだぜえっ！」
しかし、広一の責めは終わらない。大股開きに抱えあげた膝裏を固定するように両手で掴むと、ごつん、ごつんっ、と腰を打ちつける。
「やめ、やめてぇ〜〜っ!?……そ、そんなにされると……あ、あたしぃ……いいっ、いっちゃうぅぅっ!?」
（こ、幸ちゃんじゃないのにぃ……あ、あたし……いっちゃうぅぅっ!?）

申し訳ありませんが体験版はここまでです。
こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。
お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。